



地域の糖尿病医療の“受け皿”として、 高質な診療と円滑な連携を

2013年10月取材

兵庫県神戸市
ながお内科クリニック 院長
長尾 宗彦 先生

須磨ニュータウンの先駆けとして栄えた神戸市の名谷地区は、入居開始から40年以上が経過し、住民の高齢化に伴い、糖尿病をはじめとする生活習慣病の増加が顕在化しています。長尾宗彦先生が同地区で開業する知人から継承する形で、ながお内科クリニックを開業したのは2005年のことです。

慢性疾患の継続管理は診療所が積極的に担うべき

開業まで同地区の独立行政法人国立病院機構神戸医療センターの診療部長を務めていた長尾先生は、「入院や重症患者の治療をメインとする病院では、近年は長期処方も可能ですから、慢性疾患の継続管理が難しい面があります。生活習慣病、特に糖尿病の治療は、気軽に来院できる診療所というスタイルが適していると、以前から考えていたのです」と語るように、糖尿病診療の“受け皿”的な診療所の必要性を強く感じていました。結果的に、自身がその役割を担うことになったわけです。地域のかかりつけ医として、生活習慣病を中心に内科全般の診療を担いますが、周辺に糖尿病専門医が少ないこともあり、開業以来、他の医療機関からも患者さんが次々と紹介され、現在では、糖尿病が全患者の約6割を占めます。



地区の医療ゾーン内にある同クリニック。周辺は静かな住宅地ですが、他科の診療所がいくつか近接しています。眼科もあり、眼底検査などの連携もスムーズに行うことができます。

以前の勤務先との円滑な病診連携



合併症の予防はもちろんですが、その兆候を見逃さず、速やかに紹介するため、頸部エコーやABI/CAVIなどの検査をできるだけまめに実施するようにしています。

「血糖値が非常に高かったり、合併症の疑いなどがあれば、神戸医療センターに送るのが基本です。短期入院してもらい、必要があればインスリン導入をした上で、その後の管理は当院で引き受けます。また、減量できなかつたり、腎機能が低下した患者さんなど、食事指導が難しいケースでは、同センターの『栄養管理室』に定期的な指導をお願いしています」と長尾先生。同センターから糖尿病患者さんを紹介されることも多く、非常に円滑な病診連携が行われています。一方で、眼底検査は定期的に眼科依頼するなど、長尾先生は他科の開業医との連携にも積極的です。「例えば、泌尿器疾患を抱えている患者さんがいれば、速やかに紹介して、当院では糖尿病の管理のみを行うというケースもあります。やはり、おのおのの得意分野を生かしたフォローが、患者さんにとって一番良いことですし、さまざまな疾患の早期発見にもつながります」。

臨床経験をさらなる診療レベルの向上につなげる

同クリニックでは電子カルテを導入していますが、長尾先生はそこに診療や検査結果だけではなく、栄養指導や日常生活上の注意点や、次の検査時期など、さまざまなデータを入力しています。「確かに手間は掛かりますが、限られた診察時間で適切に説明や指導を行うためにも、患者さん個々の情報は不可欠ですから」。また、最新の医療情報の収集の他、診療活動の中で得たデータを研究材料として、講演会や研究会で積極的に発表を行うなど、診療レベルの向上に余念がありません。「普段使用するお薬についてもメーカーの情報だけではなく、実際の効き方やその個人差などを、しっかり把握しておきたいですからね。その上で診療を行えば、患者さんもより安心でしょう」と語る目は、常に“患者さんにとって最適な医療とは何か”という開業以来の命題に向けられています。



「検査や待ち時間などを利用して、看護師や管理栄養士が患者さんの情報収集を行って、生活指導やメンタル面のフォローなどを臨床応変に対応してくれるので、非常に助かっています」と長尾先生。